

<b>Title</b>	ただひとつの救いのために : キリスト教学校が教会のために できること
<b>Author(s)</b>	百武, 真由美
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume29, 2015.3 : 97-113
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5506">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5506</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## ただひとつの救いのために

——キリスト教学校が教会のためにできること

百武 真由美

### はじめに

本日はお忙しい中、また牧師先生におかれましては、お休みの日に、駒込の聖学院までおいでくださいまして、どうもありがとうございます。さきほど滝野川教会の西之園路子先生より、教会の視点からのキリスト教学校とのかかわりについてご発題を頂戴いたしましたので、わたくしからは、キリスト教学校においてどのような意識を持って学校伝道にお仕えているのか、学校牧師たちの立場からご紹介したいと存じます。

とは言いましても、わたくし自身が神学校を卒業してこの四月に聖学院中学校・高等学校〔以下、男子聖学院〕に赴任してまいりましたばかりですので、わたくし自身のキリスト教学校とのかかわりを通して、教会とキリスト教学校の連携について少しお話しさせていただければ、と思います。

本当でしたら、聖学院でのキリスト教活動の隅から隅まで皆さまと共有したいところですが、本日は、

皆様の教会と学校の接点の多いポイントから、おもにお話させていただきたいと思えます。また本日は、男子聖学院におりますわたくしから発題をさせていただきますので、具体的な事例紹介は男子聖学院の事柄が中心になりますことを、あらかじめお許しいただければと思います。

本日は、次の四つのポイントから、お話をさせていただきますと思います。

- 1 救いは教会にのみ
- 2 伝道の「現場」としてのキリスト教学校
- 3 ひとつの救いのために
- 4 祈りを合わせて

## 一 救いは教会にのみ

よくよく語られることですので、皆さますでにご周知のこととは思いますが、「救いは教会にしかない」というのは、学校牧師たちの共通した認識です。洗礼と聖餐という聖礼典を執行できるのは、教会だけです。学校では、まず洗礼式や聖餐式が執り行われることはありません。また、日曜日にささげられる主日礼拝をこそ、礼拝とみならず神学的な流れもあります。ですからわたくしども聖学院の中高では、男子聖学院・女子聖学院ともに、日曜日に教会に赴いて礼拝にあずかるために、教会レポートという課題を全学年で実施しています。今日おいでいただきました皆様方の教会に生徒がお邪魔して礼拝にご一緒に参加させていただいているのは、そういう経緯があつてのこ





それでは実際のレポートを少しだけご覧いただきたいと思います。

図3は、高校三年生のレポートです。日本基督教団の柿の木坂教会の礼拝に参加させていただいて、レポートを作成したようです。本日は皆さま方の目に触れて差し支えないものを選んでおりますけれども、大変丁寧に、教会レポートの課題に取り組んでいる様子をご理解いただけるのではないかと、思います。

レポートには記入欄が二つございまして、上の欄には説教の概要を、下の欄には説教に対する自分の感想を書くことになっています。この生徒もびっしりとそれぞれの欄を埋めているのが、おわかりいただけると、思います。

わたくしどもが生徒たちのレポートを見ていつも強く思わされていることは、先生方の説教が実に生徒たちの心によく残っている、ということ。もちろん個人差はありますので、信仰や宗教に対して心がとても柔らかい生徒もいれば、少しその点の成長がのんびりな生徒もおります。けれども、わたくしどもも驚くほどに、生徒たちが一言一句、先生たちのお話を心にとどめていることがレポートからよくわかります。先生方の説教のお働きの影響の大きさを改めて実感する瞬間です。

図4は、中学一年生のレポートです。創世記三九章、ヨセフとポティファルの妻の箇所からの説教を聞いた感想です。

もう一枚、図5は日本福音ルーテル・雪谷教会の礼拝に出席した、中学一年生のレポートです。ペンテコステ礼拝に参加してきたようなのですが、「ペンテコステによって、教会が誕生した」ということを、この生徒がきちんと理解して帰ってきた様子をこのレポートからご報告したいと思います。







このように、やはり教会に行き、教会で礼拝をささげるといふことは、生徒たちに計り知れない意義を与えている、と思います。教会に行くことで、招きの言葉に始まり祝福で送り出される、礼拝全体を経験し、また真心を込めて真剣に礼拝している教会の大人の方々、あるいは同年代の教会学校のお子様方の存在は、彼らに「神さま」を意識させる重要な機会であると感じています。

そして本当に不思議で主の御業だと実感せざるを得ないのですが、この教会レポートの課題をきっかけに、毎週教会に通うようになる生徒が起こされてきて信仰告白に導かれた例を、これまでいくつも見させていただいてきました。そういう意味でやはり、救いは教会にのみ託されたものなのだ、ということ強く思わされております。そして教会の先生方はじめ、皆様があたたく生徒たちを受け入れてくださっていることに、深く深く感謝しているところでございます。

## 二 伝道の「現場」としてのキリスト教学校

とは申しまでも、わたくしどもも決して片手間にキリスト教活動を、いや伝道をしているつもりはございません。救いは教会のみにあつて、学校にはない。そんな中でわたくしどもが、キリスト教学校をどのように意義付けているかを少しお話しできればと思います。

キリスト教学校は、伝道の「現場」である。これがわたくしどもの確信です。よく語られることですが、学校の礼拝は、教会の礼拝を目指すものだ、という考え方がありますが、そうであるとすれば、学校は救いが起こる場にはなれなくとも、伝道の重要な「現場」にはなることができる、と思うのです。



写真1 毎朝の全校礼拝の様子

ですから、キリスト教学校を入口として、教会を目指し、教会でこそ救いがある、そういう流れの中に、キリスト教学校は置かれていると思うのです。

そういう意識を持って、男子聖学院では、昨年度から、毎朝、全校礼拝をささげています。

この礼拝は、毎朝、全校生徒と教職員が一堂に会して、約一五分間ささげられるものです。毎朝交代で、チャプレン副チャプレンを中心に、クリスチャンの教師たちの助けも借りながら、短く御言葉の奨励を行っております。

確かに、たった一五分の礼拝ではあるのですが、どうでしょう。約一〇〇〇人が集まって捧げる礼拝（写真1）には、あるおごそかさや勢いがある、手前味噌ですがそんな風にも感じております。

礼拝は、オルガンの前奏ののち、讃美歌を歌って始まります。写真2は、入学直後の中学一年生が、ただたどしい様子で讃美歌をひらいて、一生懸命歌っている姿です。

もしかすると、先生方は驚かれるかもしれませんが、礼



写真2 讃美歌を歌う新入生

拝中は驚くほど、講堂内は静かです。年ごろの男の子たちが、静かにお祈りなんて難しいかしら、と少し心配した時期もあつたのですが、実に真剣に祈っている姿にこちらが驚かされることがしばしばあります。

講堂には形ばかりではありませんが、講壇には典礼色に合わせた掛け物をしています（写真3）。ちょうどこの日は受難週のさなかでしたので、紫色を掲げました。生徒たちは、学校の礼拝でのこの典礼色が教会にもあることに、驚いているようで、教会に行つた後などは、そのことをわたくしどもに報告してくれます。また講壇には、キリストの椅子も用意して、ここが礼拝の場であることが、視覚的に伝わるようにも努力しております。

講壇に立つておりますと、びっくりするほど多くの生徒と目が合います。生徒たちが純粋な気持ちで御言葉を受け止めている姿に、こちらが身を正されることしばしばです。礼拝は約一五分なのですが、その流れを一覧表にしたものが表1です。時間的制約があることと、それから学校という立場から、どうしても教会とまったく同じ礼拝順序を



写真3 典礼色を掲げた講壇

表1 全校礼拝の順序

8:15:00	教室点呼	石川ベルタワーの鐘がなります。各教室にて出席点呼。簡単な連絡事項。終了後聖書讃美歌を持参して講堂へ移動。
↓	移動	
8:24:00	チャイム	8時24分から1分間チャイムが鳴ります。チャイムが鳴り終わると礼拝開始です。着席し、静粛して待ちます。
8:25:00	集合	8時25分礼拝開始です。
8:25:30	前奏	オルガン前奏曲(約1分)が流れます。心の備えをします。着席して待ちます。
8:26:30	讃美歌(1節のみ)	讃美歌を1節のみ起立して歌います。
8:27:30	主の祈り	司式者と会衆が祈ります。
8:28:00	聖書朗読	司式者が読みます。
8:29:00	奨励	8時38分～39分終了を目指します。
8:40:00	祈祷	
8:40:30	奏楽 (アーメン三唱)	祈祷後、オルガンがアーメン三唱(約15秒)を奏楽します。着席、祈りの姿勢で待ちます。
8:41:30	散会	順番に退席します。中1と、講堂後半の列から順次。

組むことはできないのですが、それでも教会の礼拝を目指すものとして、「讚美」と「祈り」と「御言葉の説教」その三つが盛り込まれるようには意識しています。

本校の礼拝は、オルガンの前奏に導かれて、讚美をもつて始まり、主の祈りをささげて、聖書を拝読します。そのあと約七分の説教を聞きます。

たった七分なのですが、生徒たちはよく説教を聞いているなあ、と実感するのは、わたくしが授業に行くと、生徒たちから説教の感想や説教にまつわる話を聴くことがとても多いのです。たった七分でも、生徒たちに御言葉が届けることは可能なのだ、いや神さまはこの七分の説教も豊かに用いてくださることを折にふれて教えられています。

### 三 ひとつの救いのために

このようにして、学校は教会の礼拝を目指しながら、礼拝をはじめとして、御言葉の種まきをさせていただいておられます。

おそらく、聖学院が教会とまつたく同じ礼拝をささげることができるようには、これからはならないでしょう。それはとりもなおさず教会と学校には、伝道においてそれぞれ固有の役割が与えられているからだと思えます。教会と学校が、神さまから、それぞれ異なった役割を与えられていて、学校は教会に行くための「きつかけ」や「入口」を用意する役割があるのではないか、と思うのです。そして学校から送られてきた子どもたちが教会につながって、教会で救いにあずかり、教会の一員となって、キリストのからだの一部とされていくのではないのでしょうか。

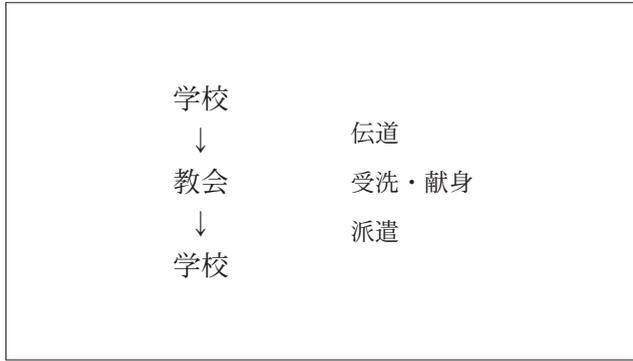


図6 ひとつの救いのために

ですから、皆様方教会とわたくしども学校は、神さまの大きな救いのご計画の、異なる部分やパートを担当させていただいているのではないかと、と思います。

そういう意味で、皆様方とわたくしどもの働きは異なってはいても、目的はひとつ、同じなのだと思えます。ひとつの救いのため、ひとりの救いのために、それぞれの働きを担わせていただいているのだと思うのです。だからこそ、わたくしどもが教会と連携を取らせていただくことがとても大切で、今日のような機会を設けさせていただいている次第です。

そこで、図6にありますようなひとつの流れをご提案したいと思えます。先ほどから申し上げているように、学校は種まきの働きとして、生徒たちにキリスト教に触れるきっかけを与える役割を担っています。学校が子どもたちに伝道することによって、生徒たちは教会へと赴く。そこで彼らがまことに福音によって変えられ、救いをいただく信仰告白や受洗という出来事が起こってまいります。おそらく教会の皆様方は、この若い魂がさらに福音によって整えられるように励まし、お育てくださっていると思います。その中で、子どもたちの中に「献身」が起こってくるのではないかと思います。献身の度合いはさまざまです。狭い意味での献身をして、伝

道教会者を目指す人もいれば、「聖書の授業もちゃんと受けよう」という次元での献身もあるかと思えます。

けれどもこの献身が重要だと思われるのは、この次の部分です。子どもたちは、教会で献身することで、再度学校に派遣されてくるのではないか、と思うのです。キリスト者として、キリストの弟子として、改めて、新しく、教会から学校に派遣されてくる。このときこの子どもは、キリスト教学校の伝道において、財産のような存在となります。というのは、教会で育てられて派遣されてきた子どもたちは、たとえ少数であっても学校の礼拝を、まことの礼拝足らしめる重要な存在だからです。彼らが真摯に礼拝することは、周りの仲間たちに、ときに説教以上の大きな影響を与えます。わたくしどもが十を語るよりもっとたくさんのことを、教会から派遣されてきた子どもがまわりに教えてくれることがあるのではないか、と思います。

教会から遣わされてきた子どもがひとりそこにおいて、信仰の姿を見せてくれることによって、キリストの香りが放たれるのです。そのことによつて、どんなに御言葉が子どもたちの中で具現化するか、囿りしれません。

ですからわたくしどもは、教師たちだけ、ひいては学校教師たちだけで伝道してはなくて、こういった教会から送られてきた子どもたちとともに、その子どもたちに助けられて御言葉の種まきをさせていただいてます。そして、彼らの影響をも受けて、また新しい子どもが教会に向かつていくのです。

このような循環の中に、教会と学校は置かれているのだと思えます。そういう意味で、教会と学校は車の両輪のような関係ですし、わたくしどもは、教会の皆様方とよい連携の関係を持たせていただきたいと願っております。

#### 四 祈りを合わせて

そこでわたくしたちが願うことは、ひとつの救いのための、祈りを合わせてまいりたい、ということですが、

なかなか教会の先生方とお話しする機会、ひいては一緒に礼拝する機会は少ないのですが、折に触れて、祈りを合わせてまいりたいと思つていきます。わたくしどもは、それぞれの教会のこと、それから先生方のことを覚えてお祈りさせていただくことを大切なつとめにしてまいりたいと思ひます。そのために、ぜひ教会のご様子を、またわたくしどもにも教えていただければと思います。とくに、教会での子どもたちの様子に關しては、何でもご連絡いただければ幸いです。場合によってはお話しになりづらい事柄、たとえば生徒が教会でご迷惑をかけた、粗相をしたなどのこともあるかと思ひますが、ぜひ何でもお教えいただければありがたく存じます。

またどうぞ、キリスト教学校のためにもお祈りいただければ、と思ひます。

Iテサロニケから、使徒パウロの言葉をひとつ引用させていただきます。

兄弟たち、わたしたちのためにも祈つてください。(Iテサロニケ5・25)

わたくしどもこそ、欠けの多い中で、この伝道の働きに仕えさせていただいております。

またチャプレンたちは、教会から派遣された牧師として、学校伝道にお仕えをさせていただいております。いろ

いろと自らに足りなさを覚えることが多いのですけれども、教会の皆様のおとりなしに、いつも支えられていると思っております。ですからどうぞ、わたくしどものためにも、祈ってくださいれば幸いです。

そして祈りを合わせながら、ひとりの救いのために、それぞれの役割を果たしながら、同じひとりの神さまと一緒にお仕えしていければ、と願っている次第でございます。

以上で、不足ばかりでございますが、わたくしからの発題とさせていただきますと思います。

二〇一四年六月三〇日、「教会と聖学院との懇談会」における発題